



TITLE:

ボードレールの『哀れなベルギー!』に含まれた新聞記事のスクラップについて

AUTHOR(S):

山口, 威

CITATION:

山口, 威. ボードレールの『哀れなベルギー!』に含まれた新聞記事のスクラップについて. 仏文研究 2002, 33: 33-51

ISSUE DATE:

2002-10-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/137934>

RIGHT:

ボードレールの『哀れなベルギー！』に含まれた 新聞記事のスクラップについて

山 口 威

はじめに

ベルギーのボードレールあるいはボードレールのベルギーという問題は、依然として少なからぬ矛盾にとりまかれているように思われる。本論では、このような不透明なトポスを読み直すための方途として、いわゆる『哀れなベルギー！』*Pauvre Belgique !*の草稿群に含まれる、ボードレールによってベルギーの新聞から集められた記事のスクラップに着目し、それらの有用性を検証していきたい。

さて、この新聞資料の存在は詩人の遺稿の一部として早くから知られていたにもかかわらず、完全なかたちで印刷されたのはその死から百二十年後の1986年に刊行される、アンドレ・ギュイヨー編集になる刊本においてのことであった¹⁾。このこと一つをとりあげてみても、一般にはすでに研究し尽くされた感のあるボードレールのテキストに関することであってみれば、いささか奇妙であるという印象はぬぐいさることができない。だが、文字通りの完全版といえる上記の批評版が刊行され、ボードレールによるスクラップの全貌がほぼ明らかにされた後も、研究者たちはこれらの雑多な資料体に特別な関心を示してはいない。なるほど、編集者のギュイヨーが「民族学的²⁾」と形容するように、これらの新聞記事は同時代のベルギーの歴史や風俗を色濃く反映しており、ボードレールの文学と関連づけて論じることが容易な素材であるとは言いがたい。しかしながら、これらの素材の具体的な内容はのちほどあらためて問題とするとしても、ボードレールという一人の優れた観察者がおこなった新聞記事のスクラップという行為自体、何らかの重要性をもつと述べることで不可能だとはいえない。

実際、ベルギー滞在中のボードレールが、このような新聞記事の読みと収集という一種の主体的行為をつうじて、彼をとりまいていた社会との間に何らかの通路が開かれることは確かであろう。プレイヤッド版全集の校訂者クロード・ピショワは、『哀れなベルギー！』の紹介の中で、たいへん豊富に残る1864年4月から1866年3月までのボードレールの書簡を、この作品の「最良の注解³⁾」であると評している。ピショワのこの見解は、『哀れなベルギー！』を手にとるすべての読者に共有されるべきものである。われわれはその上で、本論考でもってピショワがここで特に触れていないベルギーの新聞からの切り抜きもまた、『哀れなベルギー！』を読む上で最良の注釈の一つとなり得ることを示してみたいと思う。まず、ベルギーのボードレールという主題

ボードレールの『哀れなベルギー！』に含まれた新聞記事のスクラップについて

に関係している基本的な問題を整理しておこう。

Ⅰ. 基本的問題

哀れなベルギー、哀れなボードレール！

ボードレールがパリからおよそ6時間半の列車旅行によってブリュッセルへ到着したのは1864年4月24日のことである。これ以降、翌1865年7月4日から15日にかけてのフランスへの旅行期間をはさんで、ボードレールは1866年6月末に病身のままパリへ連れ戻されるまで、ベルギー国内に留まることとなる。ところで、二年余りの長期間にわたるこのベルギー滞在についてはすでにいくつかの研究がある。だが、バロック芸術を賞賛したボードレールのまなざしの問題⁴⁾を除くと、この滞在自体の持つ意味はこれまでどちらかといえば否定的に解釈されてきた⁵⁾。例えば、ボードレールの伝記ではベルギー時代はそれに続く悲惨な病と臨終の前兆として最終章の前半に置かれていることが常であり、多くの場合、パリの債権者を逃れて赴いたブリュッセルにおいてもなお詩人をまちうけていた数々の不運な出来事と、極度に悪化しつつある健康状態のもとで創作能力を衰えさせた晩年のボードレールの肖像が描かれることになる。そして、このようなイメージは、ジェローム・テロのようにボードレールの詩的世界について論じる場合であっても、基本的に覆されることはない⁶⁾。

哀れなベルギー、哀れなボードレール！——ベルギーにおけるボードレール（そしてボードレールにとってのベルギー）を性格づけるこのネガティブなイメージは今日でも依然として支配的なのである。

だが、ボードレールのベルギー滞在の全体を考える上で、上記の立場に立つとある大きな矛盾に直面することになる。なぜなら、この滞在がそれほどに悲惨でしかなくベルギーが詩人の嫌悪の対象でしかなかったという観点からは、ボードレールが二年間以上の長期にわたりベルギーへ留まったという、もうひとつの事実について納得できる説明を引き出せないからである。しかも、疑問はこれだけに止まらない。なにしろ、ヨーロッパにおける鉄道網の発達によって数多くの旅行者が輩出した十九世紀にあって、パリの詩人ボードレールが首都を長期間留守にして外国に暮らした経験など、1864年以後のベルギー滞在以外にはほとんど知られていないのであるから⁷⁾。このように考えてみると、この袋小路から抜け出すには、ボードレールがベルギーへ留まった積極的な理由を、あるいはボードレールがベルギーから離れられなかった必然的な要件を見付けるより他に手はなさそうなのである。

矛盾をめぐって

だが、似たような矛盾は、詩人がブリュッセルへ発った数ヶ月後にはパリの友人たちの間で早くも共有されていたものではなかったろうか。ボードレールの死の翌年、1868年にその最初の評伝を刊行した友人のシャルル・アスリノーの言葉を要約しておこう⁸⁾。

アスリノーによれば、ブリュッセルで行われた講演会は一定の成功を収めつつも実り多いものではなかったという。そして、ベルギー人たちの慣習と彼らの考えとを混同し、自身の講演会の結果を見誤ったがゆえに、ボードレールは自らの計画が失敗に帰したと感じて一種の冗談をやらかしたのだろうか、と問う。ところで、パリの友人たちはどうかといえば、ボードレールが「落胆」していると知り彼の帰還を待望する。しかしながら、たびたびの懇願にもかかわらず、ボードレールは「ベルギーに関する、あるいはむしろベルギーに敵対する書物を準備している」と答えてベルギーを離れようとはしない。他方、詩人をブリュッセルに訪ねた友人たちからは、彼は「何もしておらず」、「田舎じみて」、「線言」と「無為」との中へ落ちこんでいるとの噂も聞こえてくる。つづいて、アスリノーはベルギー時代に刊行されたボードレールの仕事を列挙しその量的貧弱さに触れている。この評伝が執筆された時点においては、文学史上画期的な『小散文詩集』*Petits poèmes en prose*も同時代人についてまとめた文芸批評集も刊行されてはいなかったのである。それでは、パリで詩人を待っていた友人らは、ボードレールが戻らない理由について結局どのように推測していたのであろうか。アスリノーは次のように書いている、

数ヶ月間待った後に、私たちはボードレールが文学以外の何らかの動機のためにブリュッセルへ引き止められているのかもしれないと疑いはじめました⁹⁾。

この文章の後、話題は『哀れなベルギー！』へ移るから、ここで言われている「文学以外の何らかの動機」がいかなるものなのかは知る由もない。だが、このような宙吊りの状態は、ベルギーにおけるボードレールという主題と向かい合うとき、今日でもわれわれが直面する状況とあまり違わないように思われる。実際、アスリノーが描いている「落胆」と「線言」と「無為」とのうちに過ぎしながらベルギーへ居座り続けるボードレールというのは、ベルナール・アンリ＝レヴィが1988年に発表した小説『シャルル・ボードレールの晩年の日々』*Les Derniers jours de Charles Baudelaire*において描いたような、ベルギーにおける哀れなボードレール像の典型ではないか。ならば、今日まで存続している悲惨なボードレールのイメージと、そこから生じてくる矛盾の根底にはいったいどのような問題が横たわっているのだろうか。この点については、アンリ＝レヴィの同小説の内容を吟味して、ベルギーのボードレールをめぐる基本的問題を浮き彫りにした横張誠氏の論文がおおいに参考になる¹⁰⁾。

横張氏が整理した、レヴィの小説が巧みに回避している論点から、今日もなおボードレール研究者たちが解決していない問題を以下の三点にまとめなおすことができる。

- (1) ボードレールのベルギー長期滞在の理由。
- (2) いわゆる『哀れなベルギー！』の誠実性の判断。
- (3) ベルギーではこれといって何もしなかった哀れで悲惨なボードレールのイメージの放置。

この論考の終わりでは、ベルギーにおいてボードレールが味わった楽しみの数々（ブリュッセ

ル郊外のユックルにあった友人で画商のステヴァンス邸の訪問等)、ベルギー滞在中に書かれた詩作品の概要、それから写真家のナダールや画家のロップスや親友ブーレ＝マラシとの交友の様子などが具体的に列挙され、件の悲惨なイメージの修正が行われている。確かに、ボードレールのベルギーが一般に信じられているほど悲惨ではなく、それなりに充実していたことを示すにはこのようにボードレールがベルギーで享受した楽しみなりを数え上げれば十分である。だからといって、それだけではボードレールが二年以上もの長期間ベルギーへ留まり続けた理由とはなり得ないのもまた事実である。パリで彼をまっていた人々の中には友人たち以外に債権者たちがいたことは確かだが、フランスへ戻りさえすれば少なくとも大嫌いなベルギー人と顔つき合わせて暮らすことは避けられたはずである。

実際、ベルギーにおける悲惨なボードレール像の修正のみならず、さらに踏み込んでその滞期間の長期化の理由まで俎上に乗せるとなれば、直感的にはボードレールのベルギー滞在を代表するテキストといえる『哀れなベルギー！』の評価の問題を避けて通るわけにはいかない。というのも、この書物の制作に何らかの誠実な意図が読み取れ、それがボードレールにとって不可避的な行為であったことが証明されるなら、ベルギーにおける哀れなボードレール像を返上できるばかりか、『哀れなベルギー！』を仕上げるために彼がベルギーへ長期間留まったというシナリオを描くこととて可能となるからである。

『哀れなベルギー！』の評価へ

では、自分の本について、作者ボードレールは一体どのように考えていたのであろうか。この書物の計画に関する言及がベルギー滞在中に書かれた書簡のうちに多く読まれることはすでに触れた。これらの言葉をありのまま受け取るとすれば、『哀れなベルギー！』を準備する際、ボードレールがそれなりの誠実さをもってしていたことは比較的容易に読み取れるのではなかろうか。

例えば、時として「ベルギーに関する私の研究」(CPI, II, p. 384)と呼ぶこともあった『哀れなベルギー！』の準備に際し、かなり念入りの読書が行われた様子は、オーピック婦人へ宛てた手紙の中で、「歴史といえただの一言だって知らず」「歴史をひどく嫌ってさえいる」にもかかわらず、「この下劣な民族の歴史にいささかでも通じようと、二千四百ページもある粗雑な一冊の本を辛抱して読みました」(CPI, II, p. 394)などと打ち明けていることなどからうかがうことができる。ボードレールは、さらに文献調査のみに飽き足らず、実際にブリュッセルの政治集会へ赴いたり、アントワープやブリュージュ等ベルギー諸都市への取材旅行の必要性をたびたび説き、実際に何度か試みてさえいる。そして、かかる入念な準備の後に書かれるのは、「同様の主題についてこれまで書かれ得たもののすべてに似ていない」(CPI, II, p. 382) 独自の作品であり、ボードレール自身もその出来ばえに満足していたようである。だが、『哀れなベルギー！』が真の意味でボードレールの誠実性に裏づけられたテキストであり得るという証左は、彼が自身と世界との関わりからこの本について語っている一節から、もっともよく読み取られるのではなかろうか。1864年10月13日付アンセルへ宛てた手紙には次のような一節が読まれる、

初めて私は、絶対的に諧謔的で、道化ていると同時に真面目な一冊の本、あらゆることについて語らなければならない本というものを、書くことを強いられました。これは私における、現代の愚劣との訣別です。人々もひょっとすると私を理解するかもしれませんが、ついに！（CPI, II, p. 409）

そして、この本に対するこのようなボードレールの考えは、ベルギーへ滞在する間およそ一貫する。1866年2月18日付、同じくアンセルへ宛てた手紙には、「現代の愚劣」という表現が「進歩と呼ばれるものすべて」と言い換えられて、以下のような一節がなお見出される、

本当のところ、次のことを付け加えて下さって結構です。『衣を剥がれたベルギー』『哀れなベルギー！』に同じ、筆者補は、飄逸な形でありながら、多くの点で十分に真面目な本となるであろうこと、そしてこの諷刺的な本の目的は、進歩と呼ばれるものすべて、そして私がばか者たちの異教と呼ぶところのものへの嘲笑であり、——神による統治の証明であることを。明快でしょうか？（CPI, II, p. 611）

今日、ボードレールの書簡を自由に参照でき、『哀れなベルギー！』のテキストをある程度客観的に読むことができる条件の下では、この本を単なる個人的な不満や健康状態の悪化に由来する不機嫌のみから書かれたものではなく、同時代の支配的な進歩的諸思想やそれを体現するベルギーの習俗、さらにはフランス文明への批判として把握するのはさして突飛なことではない¹¹⁾。だが、このような見方がされるようになったのは比較的最近のことであるし、少なくともボードレールの生前からその死後しばらくの間は、この本を公正に評価することは容易ではなかったのではないか。

その理由としては、まず、『哀れなベルギー！』の内容上の激しさの問題が考えられる。この本には、例えば、ベルギー人の身体的醜さの描写や、当時ナポレオン三世が目論んでいたとされるベルギー併合の問題との関連から、この国を触れてはならない「糞まみれの棒」などと表現する体の、激越な言辞が多く読まれる。それゆえ、友人の死後に『哀れなベルギー！』の草稿を最初に点検したアスリノーは、ボードレールが残した覚書について「本当に愉快¹²⁾」だという感想をもち自らこの本の最初の紹介者となりながら、覚書は「その未発達な簡潔さと頻出する表現のきわどさのために印刷不可能 « inimprimables »¹³⁾」であるとしている。実際、1887年にウージェヌ・クレベがベルギーに関するボードレールの草稿の重要な抜粋を刊行した折には、印刷されたのは主に美術に関する断章に限られた上、ルーベンスを「縋子をまとった下賤な男」（OC, II, p. 931 ; 932）と書いた有名な箇所などは、「奇妙な暴言¹⁴⁾」だとされ本文テキストから省略された事実もある。もちろん、ボードレールの死直後の状況に関していえば、彼の周囲の人間たちが『哀れなベルギー！』のようなテキストの取り扱いに際して必要以上に神経質にならざるを得なかった理由は他にもある。というのも、ボードレールの死後にもち上がった、その臨終に際しての宗教的態度をめぐる議論に直面し、オーピック婦人や彼の友人たちはさまざまな噂の打ち消しに躍起になっていたからである¹⁵⁾。

ここでさらに、これ以後の『哀れなベルギー！』のテキスト刊行の経緯を詳述する余裕はない。だが、1976年に刊行されたプレイヤッド版の解説においてもなお、この本が「ボードレールの奥深い本質には属していない¹⁶⁾」という1955年に刊行された全集編者の言葉が肯定的に紹介されていることから、『哀れなベルギー！』を制作したボードレールの誠実性は依然として十分に評価されるに至っていないように思われる。

以下、この誠実性の問題を念頭に置きつつ、資料収集という行為の実態をみていきたい。

Ⅱ. ボードレールによるベルギー新聞のスクラップ

新聞資料収集の実態

今日知られる限り、『哀れなベルギー！』を構成する紙片は全部で三百七十葉を数える。この枚数は、詩人の死後に友人のプーレ＝マラシの手で通し番号を記入された三百六十一葉に、これらとは別個に残っていた九葉の紙片を加えた数字である。『哀れなベルギー！』のテキストは、通常プーレ＝マラシが付した番号にもとづいて配列されているが、三百六十一葉のうち最後の三百五十二番から三百六十一番までは特に「梗概」« Argument »と呼ばれ、それはボードレールがバリーで代理人を通じて行った出版社との交渉用に準備した『哀れなベルギー！』各章の目次と要約からなっている。本論考で取り上げる主にベルギーの新聞資料から収集された資料は、これらの草稿に含まれるかたちで残されたものである。

では、『哀れなベルギー！』を構成するためにボードレールが行ったという新聞記事の切り抜きとは具体的にはどのようなものだったのであろうか。まず、このスクラップ行為そのものの物質的側面（量的広がりと時間的広がり）から記述していこう。

まず、ボードレールがスクラップした記事は全部で六十一編で、これらは二十種類の新聞（うちベルギーの新聞が十八紙、フランスの新聞が二紙）から集められ、同一の号からは通常一篇の記事が、ときには二篇ないし三篇が切り取られている。これらの記事のほとんどはボードレールによって他の草稿が書かれているのと同じ紙の上に貼り付けられ、欄外には、これもやはり彼の手で、簡単な見出しと新聞の名前と日付からなる注記が書き入れられている。また、記事の中にはびっしりと下線が引かれているものや、記事の一部分だけが採集されているものもあり、ところどころにボードレールによる読書の痕跡が残る。なお、例外的には、切り抜きだけで台紙のないもの、ボードレール自身の手で台紙の上に筆写されたもの、あるいはベルギーの初代国王レオポルト一世死去の折に発行された新聞の特集号のように小冊子がまるごと残っている場合などもあるが、ここではこれ以上立ち入らない。

さて、全部で六十一篇というと新聞からのスクラップとしてはあまり多くないような印象を受ける。だが、実際にこれらの記事に目を通すと、われわれはまずその量的な豊富さに驚かされる。すでに触れたアンドレ・ギュイヨーによって編まれた批評版では、これらの記事は小さな活字で印刷されているにもかかわらずポッシュ版にして百三十ページほどの分量にもなる。も

もちろん、集められた資料が大量であるからといって、それだけでボードレールによる資料収集の充実度を計るわけにはいかない。だが、そこへ資料収集が行われた時間的な幅という別の要素を掛けあわせてみてはどうだろう。現在までにわかっている新聞の発行日付¹⁷⁾にもとづくと、ボードレールによる資料収集は、1864年6月1日発行の『自由検証』紙 *Le Libre Examen* から1865年12月24日発行の『ベルギー広告』紙 *La Publicité belge*, 『経済』紙 *L'Économie*, 『ベルギーの星』紙 *L'Étoile belge* までのおよそ十九ヶ月間にわたって続けられたことになる。

『哀れなベルギー！』の着想から「終了」まで

ボードレールによる新聞からの資料収集はかくも長期間続けられたわけだが、それは『哀れなベルギー！』の制作時期の全体とどのように関係しているのであろうか。

まず、最初の記事が切り取られた1864年6月1日という日付については、『哀れなベルギー！』の原型ともいえる「ベルギー通信」の計画がボードレールの口から初めて語られた、ミシェル・レヴィ宛て手紙の日付に一致していることを指摘しておきたい。よく知られているように、ボードレールは当初、この「ベルギー通信」という手紙形式のコラムをフランスの『フィガロ』紙 *Le Figaro* へ連載する予定であった。ベルギーに関する記事を書くというアイデアはボードレールのうちで急速に成長していったようで、早くも同年6月11日付オーピック婦人宛て手紙では、この連載記事を単行本化してもう一儲けする計画が云々されている。そして、同年8月下旬以後は『フィガロ』紙への連載については言及がなくなり、最終的には単行本の『哀れなベルギー！』の執筆がつづけられることになる。

ところで、上記の仕事の進行状況をボードレールが行っていた記事のスクラップのそれと照らし合わせてみると、ボードレールが書簡の中で書いている内容をさらに客観的に眺めることも可能になる。例えば、ボードレールは件の「ベルギー通信」の進み具合に関して、同年7月14日付アンセル宛て書簡の中で「風俗の問題（風俗、政治、聖職者階級、自由思想家）はすでに書き上げています」（*CPI*, II, p. 387）と書いている。だが、書簡集を編んだピショワがこの箇所へつけた注の中で説明するように、今日われわれが知るのはボードレールが準備していた「草稿」のみであることから、事実として『哀れなベルギー！』が書き上げられることは決していない¹⁸⁾。

ここでボードレールによる資料収集の進行状況を参照すると、この時点までにボードレールが集めていた記事は七篇を数えるのみで、数にすれば今日残っている新聞記事の割強にすぎない。また内容的に、ボードレールが書き上げたという「風俗の問題」がこれ以後に集められた記事の中にも多く読まれることから、ここでのボードレールの言葉を鵜呑みにすることはやはりできない。そうしてみると、上記の書簡の一節などはむしろ、アンセルを向こうに一種の虚勢を張っていたとも読めるのである。

このように、ボードレールによる記事のスクラップの進行と対照することによって、われわれは『哀れなベルギー！』が書かれる過程をより客観的かつ多面的に理解することができるようになるわけだが、似たことはもう一つの日付、すなわち新聞からの資料収集が終わる1865年12月24日をめぐっても言えるように思われる。

*

1865年後半、ボードレールは金策に奔走したフランスへの旅行（7月4日から7月15日）からブリュッセルへ戻ると、パリの代理人ジュリアン・ルメールを介してガルニエ書店との出版契約交渉を進める。『哀れなベルギー！』は、かなり以前からこの種の交渉の折に「出版社のための餌」（CPI, II, p. 408 ; 510）に使われるはずであった。だが、同年10月下旬この本が「取引からは除外される」（CPI, II, p. 536 ; 538）ことになると、ボードレールはルメールを急かしてその版元を探しはじめる。さて、今日「梗概」と呼ばれるのは、書店との交渉用にこのころから準備されはじめた「とてもよく配列されかつとてもわかりやすい」（CPI, II, p. 538）目次のことである。三十三章分の見出しと内容紹介からなるこの「梗概」を読むと、『哀れなベルギー！』の内容はこの時期すでにほとんど固まっていたように思われる。実際、同年11月13日付オーピック婦人宛て手紙の中で、ボードレールはこの本について次のように書いている、——「確かに、ベルギーに関する本はとてもはかどりました。それにはわずかなものが足りないだけなのです。とはいえ、金銭の完全な欠乏ゆえに、僕はこの本を仕上げられずにいます。」（CPI, II, p. 542）

さて、『哀れなベルギー！』のための資料収集がこの時期に事実上終了したと考える根拠は他にもある。それは、やはりボードレールによる新聞記事のスクラップにもとづくものである。上で一節を引いた1865年11月13日付の手紙の後でボードレールが集める記事はというと、まず同年11月末に『ガゼット・ベルジュ』紙 *La Gazette belge* の二つの号からとられた国会答弁に関する記事三篇があり、その後は同年12月になってから『ベルギー独立』紙 *L'Indépendance belge* の12月11日号がまるごとと、12月24日発行の三紙からとられたベルギーの新旧国王に関する記事三篇がある。ところで、ここで注意したいのは、ボードレールがそっくり保存した『ベルギー独立』紙の12月11日号とは前日10日に崩御したベルギー国王レオポルト一世の追悼特集号であるということである。同年12月21日付アンセル宛て書簡で、ボードレールは初代国王の葬儀の様子を「この国葬の一切は、ぞっとするような飲酒行為によって説明されます」と書き、首都ブリュッセルの有様については「街路が、小便と嘔吐物とによってかくもいっぱいになったことは今までありませんでした」と描写する。そして、ある夕べに悲惨な路上に転んでしまったという彼自身の経験もあり、「私は、旧王に関する一章を付け加えなければならなくなりました」（CPI, II, pp. 550-551）と言っている。

ボードレールは、その三日後の同年12月24日発行の新聞から、亡くなったレオポルト一世の国葬と新王レオポルト二世の即位の様子を伝える記事を実際に採取し、これをもって彼の新聞記事のスクラップが終わっている。こうしてみると、ボードレールによる資料収集の期間が、『哀れなベルギー！』の始まりと終わりとに深く関わるかたちで、この本の制作期間の全体をはほぼ覆っていることがわかるであろう。なお余談ながら、1865年12月以降ボードレールはしばしば頭部の神経痛に苦しみ、年が改まると症状はさらに悪化する一方であった。この頃、パリで続けられていた『哀れなベルギー！』の出版交渉は、管財人アンセルを動員しながらも最終的に適当な書店は見つからなかった。プーレ＝マラシの手で『漂着物』*Les Épaves* が発行されるのは1866年2月末、そして、ボードレールが、この親友とともにナミュールのロップス家を再訪した折に、サ

ン＝ルー教会前で転倒するのは、それから約二週間後の同年3月15日のことである。

新聞の傾向と選択の仕方

さて、ボードレールが参照した新聞は全部で二十紙であり、そのうち十八紙がベルギーの新聞で二紙がフランスの新聞であることはすでに触れた。彼が選んだ新聞には明らかな傾向があるが、ここではこれらの新聞の政治的傾向にしたがって、大きく三つにわけて整理しておきたい¹⁹⁾。

まず、第一のグループは政治的に自由主義派勢力を代表する諸新聞であり、全二十紙のうち実に十四紙がこの傾向の属する。その他顕著な特徴としては、パリで発行されていた『国民世論』紙 *L'Opinion nationale* 以外、これらはすべてブリュッセルで発行されているということがある。ボードレールが滞在した当時のベルギーは、教育などの世俗化と選挙などの諸制度改革をめぐり、憲法と政府を尊重する立場から改革をすすめる自由主義派諸勢力と、改革を拒むカトリック派諸勢力との対立が絶頂に達した時期であり、首都ブリュッセルは自由主義派諸勢力の本拠地であった。なお、これら十四紙はそれらの内容的からさらに分類することが可能である。まず、十四紙のうち半分ほどを占めるのは、『ベルギー独立』紙のような議会派の政治紙であり、これらの中にはルイ・イーマンスのような現役の政治家が編集長や政治局長を務めた『広告幹旋』紙 *L'Office de publicité* や『ベルギーの星』紙なども含まれている²⁰⁾。そして、残り半分は『自由検証』紙や『公衆論壇』紙 *La Tribune du peuple* のような民衆をもその読者としていた一種の政治結社の機関紙と、「シャリヴァリ・ベルジュ」の副題をもつ『鈴』紙 *Le Grelot* や『サンチョ』紙 *Sancho* や『いたずら者』紙 *L'Épiègle* などの大衆的な風刺ゴシップ紙からなっている。

第二のグループは、自由主義派諸勢力と政治的に対立していたカトリック系保守派の新聞三紙である。これらのうちに含まれる『ブリュッセル新聞』 *Le Journal de Bruxelles* や『平和』紙 *La Paix* (ともに発行地はブリュッセル) は、保守派政治家のジャン＝バチスト・コーマンスが編集長を務めた政治紙であり、それらの紙面ではしばしば自由主義派の政策が痛烈に批判されている。なお、第三のグループは、政治的にそれほど明確な傾向をもたない三紙、すなわちトゥルネー発行の産業新聞であった『経済』紙、パリで発行されていた文学新聞の『時代』紙 *Le Temps* , その名前からおそらく演劇専門紙であったと考えられる『幕間』紙 *L'Entracte* である。ボードレールは、各紙から順に、レオポルト一世の臨終の場面を伝える記事、1865年6月18日にブリュッセル西部のイクセルで亡くなったベルギー画家アントワヌ・ヴィールツの死亡記事、1864年8月6日にブリュッセルで上演された『イエズス会士』 *Le Jésuite* というメロドラマの短評を切り取っている。

ボードレールによる新聞の選択にみられるこのような傾向から、一見して明らかなのは、彼がベルギーの自由主義派諸勢力の活動や言説に多大な関心を寄せつつ資料を集めていた、ということであろう。その書簡の中で「自由思想家だの、進歩だの、現代の愚劣すべてを毛嫌いしている」(CPI, II, p. 409) などと書き、これらの諸勢力と彼らの思想などに対する嫌悪をしばしば表明するボードレールであるから、その手でおこなわれた新聞の選択や記事の選択のうちに、その批判的意図を読み取るのは難しいことではない。事実、ボードレールが集めた記事の大半は、『哀れ

ボードレールの『哀れなベルギー！』に含まれた新聞記事のスクラップについて

なベルギー！』の中で、ベルギー人の野卑で残虐な風俗を集めた第五章、ベルギーで話されている奇妙なフランス語の用例を集めた第十五章、ベルギーにおける不信心について書かれた第十七章と十八章、そして、選挙や議会などの政治風俗を取り上げた第十九章と二十章に集中しており、ベルギーにおいて彼が観察したさまざまな「愚かさ」を証拠だてる事例を豊富に提供する。

Ⅲ. 新聞のレクチュール

1864年6月の事例から

それでは最後に、ボードレールが新聞を読み記事を集めていたようすを、彼が参照した新聞の各号にもとづいてみることにしよう。だが、限られたスペースの中でボードレールが集めた膨大な資料をすべて検証することは困難であるから、ここでは資料が集められた期間を、その新聞の発行日から1864年6月分のみに限定したい。なお、新聞という資料媒体の特性として、このように時間的順序に従って分類できることは研究上大きな利点であり、以下の分析でもこの特性を活かしてボードレールによる読書をあとづけてみたい²¹⁾。

さて、今日わかっている発行の日付から、ボードレールが1864年6月に読んでいたと仮定できる新聞は四部あり、発行日、新聞の名前、記事の内容の順に次のように整理できる。なお、かぎ括弧の中は、ボードレールが各記事の余白に書いていたコメントの全部ないし一部、または、記事に付けられた見出しである。

6月1日付『自由検証』紙、「カトリックの教育者に反対するある購読者の手紙」(BD, p. 350)。

同、「ある女性の世俗葬」(BD, p. 365)。

6月3日付『ベルギーの星』紙、「議会での毒舌」(BD, p. 380)。

同、「議会での毒舌」(BD, p. 382)。

6月5日付『ブリュッセル新聞』紙、「連帯主義者たち。埋葬。ベルギーの不信心」(BD, p. 363)。

6月10日付『自由検証』紙、「われわれはすでにこのヴァン＝ペーネを知っている」(BD, p. 358)。

これら記事の内容をもう少し補足しておこう。まず、6月1日の最初の記事は、当時のベルギーで知られていた、ファン＝ビールフリート嬢というカトリック系の教育者の著書に関する書評を読んだ購読者からの投書、二番目の記事はブリュッセルの自由思想 *Le Libre Pensée* という団体が行った世俗葬 « *enterrement civil* »²²⁾ に関する記事である。この自由思想という団体は、教育と葬送儀礼の世俗化をめぐってカトリック教会と対立していたグループであり、『自由検証』紙はその機関紙である。つづいて、6月3日の二つの記事であるがこれらはもともと同じ一つの記事であり、国会での自由党とカトリック系議員との間で交わされた議論を再現する。6月5日の記事は、先の自由思想と同様に世俗葬を盛んに行った、連帯主義者 « *Solidaire* » という団体の活動に関するものである。ボードレールは、ファン＝ペーネというフランドル系の医師であり作家で

あった人物の世俗葬のようすを、批判的に伝えたカトリック系の『ブリュッセル新聞』から記事を取っている。そして最後の6月10日付『自由検証』紙の記事も、やはり世俗葬の模様を伝えるものである。そこには団体連帯主義者が行ったそのファン＝ペーネの葬儀のことが読まれることから、ボードレールは記事の余白に「われわれはすでにこのファン＝ペーネを知っている」と記入したのである。

では、これらの記事はボードレールによってどのように読まれていたのだろうか。

まず、1864年6月上旬といえば、ボードレールがベルギーへやってきてからおよそ六週間しか経過していないことから、第一に推測されるのは彼がこれらの記事からベルギーについてよりよく知るために必要な情報を集めていた、ということであろうか。実際、これらの記事は、当時のベルギーの宗教と世俗化の問題と政治風俗について伝えており、ボードレールが早くからこれらの主題に関心を抱いていたことは、すでに一度触れた1864年7月14日付アンセル宛て手紙のうちに読まれる、「風俗の問題（風俗、政治、聖職者階級、自由思想家）はすでに書き上げています」（CPI, II, p. 387）という一節からも明らかであろう。今日残っている記事の中で、それらを採出した新聞の日付がこの7月14日より古いものは、先に列挙した四部の新聞だけである。だから、時間的順序に素直に従うなら、ボードレールがこのとき既に書き上げていた一節というのは、上で触れた七篇の記事を参考にして書かれた可能性がある。

だが、実際にここで取り上げている1864年6月という日付の下に整理された新聞の切り抜きを読むと、ボードレールがこれらの記事を集めて単なる情報収集を行っていただけとは思えない。というのも、欄外に残る書き込みや彼自身の手で記事のそこかしこに赤鉛筆で引かれている傍線の跡をたどると、ボードレールがどうやら、興味を覚えた文ないし言葉に印をつけそれらを選出している、という印象を受けることがあるからである。このことは、また、6月3日付『ベルギーの星』紙に掲載された、前日6月2日の国会の模様を伝える記事に、ボードレールがつけている「議会での毒舌」（BD, p. 380 ; 382）といった見出しのつけ方にも関係しているように思われる。ここでは特に、6月1日付『自由検証』紙から切り取られた記事を取り上げ、詳しくみてみたい。

諸事件の追跡から内的対話へ

6月1日付『自由検証』紙に掲載されたこの購読者からの投書の場合、上で書き出した「購読者の手紙」というコメントの後ろには、やはりボードレールの手で「つねに、自然な生よりよいものは何もないという確信」（BD, p. 350）と書き付けられている。そして、この投書記事の中で件の「購読者」が「あるブリュッセルのある新聞」の記事から引用した以下の文章に、ボードレールの手で下線が二箇所引かれている、

あるブリュッセルの新聞は書きました、「ファン＝ビールフリート嬢の理論はレスボスの娘たちのことを思わせる、そして、このような理解が少女たちを教育する一人の女性の精神の中にどのようなして生まれ得るのだろうか、とわれわれは自問する。あらゆる道徳的感覚を奪われ、心の代わ

りには祈祷書しかもたないというのでなければ、人はこのようなことを書きはしない。」(BD, p. 350) [下線はボードレールによる；筆者補]

この投書の中で、ゼントに住むという件の購読者は彼が別の新聞で読んだこの一節をいわば枕にして、このカトリックの教育者を批判している。本論考でみてきた『哀れなベルギー！』の目的に照らすと、この記事を読んでいるボードレールの基本的な立場は、二つ目の下線が引かれた箇所から読み取れるような、団体自由思想のメンバーの反宗教的態度への批判であると考えてまちがいはなかろう。けれども、この記事に対する彼のコメントに読まれる「自然な生」*« la vie naturelle »*のような表現と、最初の下線が引かれた「レスボスの娘たち」とを対照すると、そこには彼の詩的世界へもつながり得る、読書行為を介しての一種の内的な対話の痕跡を読みとることも可能なのではないか。というのも、かつて詩集『悪の華』*Les Fleurs du mal*の題名候補の一つに、『冥府』*« Les Limbes »*と並んで『レスボスの女たち』*« Les Lesbiennes »*という案があったことを、さらに、1857年の裁判によって詩集からの削除を命じられ、後に『漂着物』に採録された「禁断詩篇」の一篇がまさしく「レスボス」*« Lesbos »*というタイトルであることを、われわれはすでに知っているからである、

なぜなら、レスボスが、地上において万人の中から私を選んだのだ、
花と咲くこの島の処女たちの秘密を歌うようにと、
だから私は、暗い涙と混ざり合う、抑えられない哄笑の、
その黒い神秘へは、幼い頃から参入が許された。
なぜなら、レスボスが、地上において万人の中から私を選んだのだ。(OC, I, p, 151)

さて、最初の引用へ戻るとしよう。『自由検証』紙から取られたこの記事の後半では、カトリック系教育機関のような「危険な場所」*« lieux dangereux »* (BD, p. 350) が相変わらず政府の庇護の下、厳格な宗教教育を維持していることが批判されている。ゆえに、引用では、件のファン＝ピールフリート嬢の周囲に集うこの一種の信教団体のことを、「レスボスの娘たち」に例えてその偏向ぶりを揶揄しているわけである。だが、レスボスによって選ばれた詩人ボードレールにとっては、「心の代わりに祈祷書をしかもたない」狂信的な団体を「レスボスの娘たち」と呼ぶことこそ、読者である彼をして強力な笑いを引き起こさせずにはおかない滑稽な表現であったのではないか。なぜなら、このギリシアの島で処女たちのみによって繰り広げられたという逸楽の世界について、ボードレールは「正と不正との掟」を超越する恋愛上のトポスとみなしていたのであり、彼にとってそれは、自由主義思想やカトリックといった「他の宗教」に侵食されることを知らない自律的なもう一つの「宗教」であったからである。

正と不正との掟が、われわれにどうしろというのだ？
多島海の誉れである、崇高な心をもつ処女たちよ、

御身らの宗教は、他の宗教に劣らず尊いもの、
そして愛は〈地獄〉をも〈天国〉をも笑いのめすだろう！
正と不正との掟が、われわれにどうしろというのだ？（OC, I, p, 151）

ベルギー新聞との最初の出会い

ところで、ボードレールによる新聞記事の集め方からは、1864年6月という彼のベルギー滞在のごく早い時期に集められたにもかかわらず、非常に合理的で無駄のない資料が選ばれている、という印象を受ける。ボードレールがベルギー滞在中に集めていた資料が、はたして今日残るものだけであったのかどうかを検証するすべはない。だが、現存の資料のみからでも、最初から『自由検証』紙などというかなりマイナーな新聞を選んでいることや、一つひとつの記事にしても選び取った記事の総数とは反比例するように『哀れなベルギー！』の内容にぴったり合った適切な事例を集めていることなどからみて、ベルギー国内のさまざまな状況についてボードレールがかなり早い時期から詳しく知っていた、と考えるのが普通ではなかろうか。

事実、ボードレールが最初にベルギー旅行の計画について話し始めるのは、実際に出発する1864年4月よりはるかに早く1863年7月初旬のことであった²³⁾。当時のフランスで読まれていた旅行ガイドブック²⁴⁾では、ベルギー国内のカトリック派と自由主義派との政治対立などについてもすでに紹介されているから、ボードレールが出発前にこうした事情に通じていたと考えるのは自然である。それに、彼の周囲を見わたすとゴーティエやサント＝ブーヴなどベルギー旅行の経験者は数多くいたし、1862年9月にブリュッセルで開催されたユゴーの『レ・ミゼラブル』*Les Misérables*の刊行記念祝宴会の折には、彼の友人であったバンヴィル、シャンフルーリ、ナダール、ノエル・バルフェといった面々もラクロワからの招待を受け参加している。さらに、より身近な情報源としては、破産のためにボードレールより一足早く国境を越え、1863年秋以降ブリュッセルで活動していた友人プーレ＝マラシ²⁵⁾や、ブリュッセルのラクロワ等の書店と提携を結んでいたエッツェルなどもいた。

しかし、ボードレールとベルギーとの直接の出会いはいっと古く、しかも興味深いことにベルギーの新聞のある記事への書きこみによって跡づけられる。1857年7月15日付『ブリュッセル新聞』に「Z.Z.Z.」の署名で掲載された、『悪の華』とその著者とを激しく攻撃する記事²⁶⁾がそれである。『悪の華』の裁判に際して資料として加工されたいこの記事の上下には、ボードレールの手で書きこみが残っている。上部の書きこみでは、記事の中で問題にされていたという「ベランジェおよびキリスト教的感情」のことと、当時はまだ親交があった教皇至上権派のジャーナリスト、ルイ・ヴィヨから言われたという弁護上のアドバイスに触れている。だが、ここでわれわれの関心をひくのはこの記事の下側に書かれた次の文章である、

聞くとところによれば、『ブリュッセル新聞』はベルギーで『世界』紙「*l'Univers*」の意見を代表しているという話だ。それはカトリックの密偵、とはいえベルギー風なのだ「*mais Belge*」！つまり、親玉の悪いところばかりで、その知性はもち合わせてはいない。

ボードレールの『哀れなベルギー！』に含まれた新聞記事のスクラップについて

その発行所はブリュッセル市、殉教者広場 « place des MARTYRS », 薔薇街 « rue des ROSES »
にある！！²⁷⁾

この引用の最初の一文からわかるのは、まず、ボードレールがこの時点においてすでに『ブリュッセル新聞』紙のようなベルギーのカトリック系新聞の傾向やらについて、かなり正確な知識をもっていた（あるいは、知識をもち得た）ということである。そうであるとするならば、それからおよそ七年後に『哀れなベルギー！』の制作を決意し資料収集を行う際に、いきなり『自由検証』紙のような新聞から読み始められたことにも合点がいく。だが、上記の一節は、そのような知識の側面のみならず、彼のベルギーに対する見方においてさえ、『哀れなベルギー！』のそれを彷彿とさせる。実際、『ブリュッセル新聞』のあり様を「ベルギー風」と呼び、親玉であるフランス（の新聞）から短所のみを受け継いでいると断ずる口調は、阿部良雄氏が指摘するように²⁸⁾ およそ七年の後に書かれることになる『哀れなベルギー！』を予告するものだといってよいだろう。だが、ボードレールによる新聞記事のレクチュールを具体的に分析してきたわれわれにとって、さらに興味深いのは、最後の一文の「殉教者広場、薔薇街にある！！」という一節にみられるボードレールのコメントの仕方である。ボードレールは、ここでブリュッセルに実在するこれらの地名が、「カトリックの密偵」である『ブリュッセル新聞』の発行先住所であるという偶然の符号を発見し、それらを書き出したのだった²⁹⁾。

1857年に書かれたボードレールによる書きこみは、さまざまな側面で『哀れなベルギー！』を制作した際に行われた資料収集の原型となり得る性格のものである。そして、そうであるならば、反対に次のように言うことも可能なのではなからうか。つまり、『哀れなベルギー！』という本の着想には、なるほど、ボードレールがベルギー滞在時に経験する不運や不機嫌は欠くべからざる要因であった。しかしながら、そこで描かれるものごとの萌芽はこの本が着想される時点よりもかなり以前から彼のうちに実在しており、ベルギー滞在中の経験はそれに対して一種の触媒として機能したのではなかったらうか、と。

IV. 結語にかえて

これまでの議論の中で、われわれは（はなはだ駆け足ではあったが）ベルギー滞在中のボードレールが行った新聞からの資料収集の概略を記述し、個別の記事におけるそのレクチュールの分析を通じて、その内容に対する彼の批判やその読解の際に彼が覚え得たであろう楽しみの一端を示すことができたように思う。本論考を終えるにあたって、ここでもう一度、彼のベルギー滞在がかくも長期化した問題と『哀れなベルギー！』の誠実性の問題について、やはりボードレールによる新聞のスクラップと関連させながら、一定の見解を述べておきたい。

ベルギーへの滞在が長期化した理由に関しては、まず、新聞にもとづく資料収集がなにゆえに十九ヶ月もの長期間にわたって続けられたのか、というふうに観点をずらして考えてみよう。つ

まり、ボードレールが資料集めにかくも執着した理由を問うてみたいのだ。この問題の根本には、おそらく新聞という媒体とボードレールとの間にある基本的な関係が大きく作用しているように思われる。そもそも彼にとっては、赤鉛筆を手にそして鋏と糊とをわきに対峙しつづけた新聞という素材からして、本来それはさしたる共感の対象となることもなかったし、時には嫌悪の対象にすらなり得る、唾棄すべきものであったのだ。

事実、ボードレール自身、駆け出しの頃には自らも一人のジャーナリストとして筆をとり糊口をしのぎながら、はやくも「1845年のサロン」《Salon de 1845》の冒頭で新聞批評の不正さを「その嘘の数々、その臆面もない仲間うちでの賞賛」(OC, II, p. 351)という言葉で告発し、十年後に書かれた「1855年の万国博覧会、美術」《Exposition universelle, 1855, Beaux-arts》の中でも新聞をして進歩と文明を享受する「良きフランス人すべて」(OC, II, p. 580)の小道具だとみなしていたのではなかったか。そして、さらに十年近く後に構想された『哀れなベルギー！』には、「ベルギーとアメリカ合衆国、新聞によって甘やかされた子供たち」(OC, II, p. 822)と書かれ、もはや新聞は自由主義と産業発展を謳歌するこれらの国に奉仕するものでしかないと考えられている。ゆえに、新聞とは、彼の美意識から考えて一種の汚物に等しいものだと言ってもよいものであったろう、

あらゆる新聞は、最初の一行から最後の一行まで、ぞっとするようなことのつづれ織りでしかない。戦争、犯罪、盗み、淫行、拷問、君主たちの犯罪、諸国民の犯罪、個人の犯罪、普遍的な残虐の陶酔だ。

そしてこの胸の悪くなるようなアペリチフを、文明人は毎日の朝食に添えるのだ。あらゆるものが、この世では犯罪の汗を滲ませている、新聞も、壁も、人の顔も。

純潔な手が嫌悪の痙攣をおこさず新聞に触れ得ることが、私には理解できない。

(OC, I, pp. 705-706)

このような観点から、ボードレールが読んでいたベルギー新聞を位置づけてみてはどうだろう。ボードレールの意見に耳を傾けるなら、「進歩を信じること」こそが「ベルギー人の教義」(OC, I, p. 681)であり、彼らは、その付和雷同の精神に従って「一個の意見を見出すために団体を結成する。」(OC, II, p. 858)そして、この国の風俗では各々の団体の意見を代弁する新聞《organe》でもって論戦を戦わせることも常だというから、ベルギーで集められた言説とは彼にとって、「大きな厠」(OC, II, p. 836)と皮肉られたこの町の中心を流れるセンヌ河³⁰⁾に匹敵する、極めつけの汚物の集積であったといっても過言ではなからう。そして、それらのうちの選り抜かれた言葉がさまざまなカテゴリーにしたがって分類され、集めて貼り付けられて出来上がる『哀れなベルギー！』とは、ロジェ・ケンプの表現を借りるなら「恐ろしい目録³¹⁾」《terrible inventaire》に他ならない。ボードレールはこの「目録」作りにのめり込んだのだ。だが、それはいかなる理由からか。

それは、第一に、すでに一度引用した1864年10月13日付アンセルへの手紙の一節に書かれて

いたように、「現代の愚劣と訣別」するために「あらゆることについて語らなくてはならない本」(CPI, II, p. 409)を書くのだという文字通り真面目な動機があったと考えてみたい。だが、本論の中でみてきたように、このような仕事が時として一種の楽しみをもたらしたことも確かであろう。そうでなければ、健康の優れない身体を抱えながら食事にすら満足できない土地に長く留まることなどとうてい不可能であったろう。とはいえ、ここでもう一つ疑問が生じてくる。それは、何ゆえにその本がベルギーについての本でなくてはならなかったのか、という疑問である。実際、先の書簡の中では、ベルギーに関する本は一種の手鳴らしでありそこで研いだ「爪」« mes griffes »は「後日それをフランスに対して使うつもりです」(CPI, II, p. 409)とも言っている。だが、1865年1月1日付オーピック婦人への手紙を最後に、自伝の体裁を取りつつ「全フランスに対して」差し向けられる「怨念の書」(CPI, II, p. 305)だと説明される『赤裸の心』*Mon cœur mis à nu*の題名はもはや見出されない。してみると、『哀れなベルギー！』は『赤裸の心』が担うはずであった「怨念の書」の役割を引き継がされたのであろうか。

しかしながら、ジョルジュ・ブランがその著書『ボードレール』*Baudelaire*の終わり部分で提示する詩人の描写を借りて、「ボードレールは日々の細々とした不安をもち、あやふやな期限のままに、われわれと同じように、死ぬのは他人たちだと思いながら、生き続けるのだ」と言うこともできるのではないか。これは、神をさえ十分に受け入れ得ないほどに強烈な観念論者であったため、逆説的に日常の生の中に充実を発見するというボードレールの姿である。ベルギーにおいて、進歩なり文明の全的な批判という高い理想を持ちつつも、新聞のような日常のうちに素材を求めることを止めなかったボードレールは、このようなイメージとともに語られるべきであるように思われる。つまり、『哀れなベルギー！』が誠実な作品であるか否かはともかくとして、彼自身が今ある場所で生きるということに対し常に誠実であり得たのであり、そこから楽しみをくむすべをも心得ていたのだと考えてみたいのである。ブランは最後に次のように付け加えることを忘れなかった、「だが、生きるにまかせるというのも、生半可なことではない³²⁾」。

註

ボードレールのテキストは基本的に、クロード・ピショワ編集になるブレイヤッド版『全集』と『書簡集』を使用し、引用の際は引用文末尾に以下の略号と頁数を示す。ただし、『哀れなベルギー！』に関してのみ、必要に応じてアンドレ・ギュイヨー編集の批評版を参照し、引用の際は同様に略号と頁数を示す。なお、原文がイタリック体で書かれた箇所の和訳文には傍点を付し、単語がすべて大文字で書かれ強調されている場合にはゴシックで表記する。詩の中で名詞の頭文字が大文字化されている場合、その語は〈 〉で括るものとする。

OC, I et II : *Œuvres complètes*, texte établi, présenté et annoté par Claude Pichois, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t. I, 1975; t. II, 1976.

CPI, II : *Correspondance*, texte établi, présenté et annoté par Claude Pichois, Paris, Gallimard, « Bibliothèque

de la Pléiade », t. II, 1973.

BD : *Fusées, Mon cœur mis à nu, La Belgique déshabillée*, édition d'André Guyaux, Paris, Gallimard, « Folio classique », 1986.

- 1) アンドレ・ギュイヨーはこの版を刊行するにあたり、ボードレールの草稿と書簡にみられる題名の変遷を吟味した上で、本の題名を『哀れなベルギー！』から『衣を剥がれたベルギー』*La Belgique déshabillée*へ変更した。(Cf. « Notice », BD, pp. 58-61 および Guyaux, (André), « *Pauvre France et La Belgique déshabillée* », *Mélanges de littérature en hommage à Albert Kies*, Bruxelles, Publications des Facultés Universitaires Saint-Louis, 1985, pp. 75-85)
なお、本論考の中で新聞や記事のデータについて言及する場合、基本的にはこの刊本に集められた情報にもとづいている。
- 2) « Notice », BD, p. 55.
- 3) « Notice », OC, II, p. 1474.
- 4) 代表的な研究として次の二つが挙げられる, Bonnefoy(Yves), « Baudelaire contre Rubens », *La Vérité de parole et autres essais*, Paris, Gallimard, « Folio essais », 1995, pp. 355-451 ならびに, Drost(Wolfgang W. R.), « Baudelaire et le baroque belge », *Revue d'esthétique*, t. XII, fasc. 3-4, juillet-décembre, 1959, pp. 33-60.
- 5) 例えば, マルセル・A・リュフは膨大に集められた『哀れなベルギー！』の覚書において読者の注意を引くのは, 「とりわけ芸術作品, 絵画, 記念碑に関するものである」と書き, ナミュールのサン＝ルー教会について書かれた一節を引用した後, この本について「その他についていえば, この膨大な, 怒りにまかせて寄せ集めた雑談集を読むのは苦痛であり, その作者の名望に何一つつけ加えるものはないと言わねばならない」と, 書く。(『流読者ボードレール生涯と作品』, 井上輝夫訳, 青銅社, 1977年, pp. 351-352)
- 6) Voir Thélot (Jérôme), *Baudelaire. Violence et poésie*, Gallimard, « Bibliothèque des idées », 1993, pp. 157-233.
- 7) ボードレールがフランスの外へ一定期間留まり暮らした例としては, 1841年から翌42年にかけてのいわゆる「インドへの旅行」が知られる程度である。なお, アンドレ・ギュイヨーは, ベルギー滞在時にボードレールが盛んに小旅行へ出かけている点から, それを「ツーリズム」というユニークな観点からとらえ直している。(Cf. Guyaux(André), « Le Tourisme de Baudelaire en Belgique », *France-Belgique (1848-1914). Affinités-ambiguïtés. Actes du colloque des 7, 8 et 9 mai 1996*, Bruxelles, Labor, 1997, pp. 249-254)
- 8) 以下の箇所は, Asselineau (Charles), *Charles Baudelaire. Sa vie et son œuvre*, suivi de *Baudelairiana*, préface de Georges Haldas, Cognac, Le temps qu'il fait, « Mémoires », 1990, pp. 85-93を参照している。
- 9) Asselineau (Charles), *op cit.*, p. 86.
- 10) 横張誠, 「ボードレールのベルギー, ベルギーのボードレール」, 『ふらんす手帖』第18号, 1989年, pp. 13-25.を参照のこと。
- 11) Cf. 拙稿, 「『哀れなベルギー！』あるいはボードレールにおけるカリカチュール」, 『関西フランス語フランス文学』第7号, 日本フランス語フランス文学会関西支部, pp. 3-12.
- 12) *Les Derniers mois de Charles Baudelaire et la publication posthume de ses œuvres*, correspondances, documents, présentés par Jean Richer et Marcel A. Ruff, Nizet, 1976, p.110.
- 13) Asselineau (Charles), *op. cit.*, p. 87.
- 14) « Présentation », Baudelaire (Charles), *Œuvres posthumes et correspondances inédites*, précédées d'une étude biographique par Eugène Crépet, Paris, Maison Quantin, 1887, p. 42.

ボードレールの『哀れなベルギー！』に含まれた新聞記事のスクラップについて

- 15) Cf. Crépét (Jacques), « La Mort de Baudelaire vue par la presse », *Propos sur Baudelaire*, rassemblés et annotés par Claude Pichois, préface de Jean Pommier, Mercure de France, 1957, pp. 191-198.
- 16) « Notice », OC, II, p. 1473.
- 17) 筆者は、2001年1月末からおよそ二週間ブリュッセルのアルベール二世王立図書館において独自に新聞資料の調査をおこなった。その結果、ボードレールによって『いたずら者』紙 *L'Épiègle* から取られた二篇の記事の日付を新たに特定しなおすことができた。まず、一つ目の記事は、『哀れなベルギー！』草稿の百六十番と百六十一番の上にボードレールの手で筆写されたものである。この記事の日付は、従来その内容から1864年5月頃と推定されていたが、実際には1865年2月12日号から取られたことが確認された。もう一つは、同草稿二百十四番に貼り付けられた記事であるが、こちらは従来いわれてきたように1865年1月31日号からではなく同年1月1日号から取られた記事であることがわかった。このことから、今日知られる限りでは、ボードレールが最初に参照した新聞の日付は、ここに書いたように1864年6月1日だということになるから、最後に参照された新聞の日付である1865年12月24日と合わせて、ボードレールが資料収集をおこなった期間は計算上およそ十九ヶ月間だということになる。
- 18) « Notes », CPl, II, p. 868.
- 19) ベルギーの新聞に関する基本的な情報は、Vermeersch (Arthur J.), *Répertoire de la presse bruxelloise (1789-1914)*, tome I (A-K) et tome II (L-Z ; avec Helmut Gauss), Louvain-Paris, « Cahiers du Centre interuniversitaire d'histoire contemporaine » n°s 42 et 50, 1965 et 1968に、フランス第二帝政期の新聞に関しては、Bellet (Roger), *Jules Vallès. Journalisme & révolution, 2 : Documents. La presse du Second Empire, de la Commune et de la IIIe République (1852-1885)*, éd. du Lérot, Tusson (Charente), 1989に詳しい。
- 20) 前者『広告幹旋』紙は、かつてベルギーへ滞在したブルードンが健筆を振るった新聞として知られている。ブルードンは同紙1862年9月7日号へ発表した論文「ガリバルディとイタリア統一」« Garibaldi et l'unité italienne »が引き起こしたスキャンダルが直接の原因となってベルギーを追われている。また、後者『ベルギーの星』紙には、当時ブリュッセル市会議員であったアルベール・ラクロワの動向などもしばしば紹介されている。
- 21) しかし一方で、資料収集の全行程が、はたして完全にボードレール自身の手によって、そして完全に日付の順序どおりに行われていたのかどうか、といった点に関してはさらに検証する必要があることも付け加えておく。
- 22) 自由思想の諸団体や世俗葬に関しては次の論文に詳しい、Lalouette (Jacqueline), « Approche comparative de la Libre Pensée belge et de la Libre Pensée française. 1848-1914 », *France-Belgique (1848-1914). Affinités-ambiguïtés. Actes du colloque des 7, 8 et 9 mai 1996*, Bruxelles, Labor, 1997, pp. 67-86.
- 23) Cf. CPl, II, p. 309, note 1.
- 24) 例えば、1860年代に出版された次のような旅行ガイドブックの「序」には、ベルギーにおける自由党とカトリック勢力の政治対立や選挙制度に関する説明ある、Du Pays (A. J.), *Itinéraire descriptif, historique, artistique et industriel de la Belgique*, Paris, Hachette, « Collection des Guides-Joanne », 1860, p. LXXVI-LXXVIII.
- 25) Cf. Pichois (Claude), *Auguste Poulet-Malassis. L'éditeur de Baudelaire*, Fayard, 1996, pp. 167-187.
- 26) Cf. « Le Procès des « Fleurs du mal » », OC, I, p. 1178.
- 27) *Œuvres complètes de Charles Baudelaire. Les Fleurs du mal. Les Épaves*, notice, notes et éclaircissements de M. Jacques Crépét, Conard, 1992, p. 320.
- 28) 『ボードレール全集』、第一巻、阿部良雄訳、筑摩書房、1983年、p. 350, 注8.
- 29) ボードレールは、1864年6月5日付『ブリュッセル新聞』から取った記事の中でも、「殉教者の観念」« l'idée du martyr » (BD, p. 364) という表現に下線を引いている。
- 30) 当時のセンヌ河の衛生状態はひどくコレラなどの危険もあったため、ブリュッセル市当局にとって淨

化は緊急の課題であった。浄化のためのプロジェクトは1863年から始動するが、実際に工事が始まったのは1868年9月のことである。Cf. *Bruxelles et le voûtement de la Senne. Catalogue de l'exposition organisée à la Bibliothèque royale de Belgique du 15 au décembre 2000 et du 2 janvier au 18 février 2001*, Bruxelles, Bibliothèque royale de Belgique, 2000, pp.23-24.

31) Kempf(Roger), *Dandies. Baudelaire et Cie*, Édition du Seuil, « Points », 1984, p. 112.

32) ブラン (ジョルジュ), 『ボードレール』, 阿部良雄・及川馥訳, 牧神社, 1977年, p. 244.